



日本代表の強化合宿で原田のどか（前列中央）、主将の山田恵里（同左）らと笑顔で写真に納まる松田光投手（同右）＝6月、群馬県高崎市（松田投手提供）

打撃強化4年、助言も

13年ぶりとなる快拳の陰には岡山が誇る右腕の存在があった。東京五輪ソフトボール日本代表の強化サポートスタッフで、国内男子屈指の強豪・平林金属ク（岡山市）のエース松田光投手（34）。27日、金メダルに歓喜する選手たちをスタンドから見守り、「感動した。この五輪に少しでも関わることで光栄」と感慨

平林金属ク（岡山） エース松田投手

に浸った。パワーのある外国人投手に対抗するため、宇津木麗華監督に打撃投手として初めて呼ばれたのは2017年夏。以来、多い年には延べ2カ月、国内外の合宿に参加した。時には120キロの速球を2時間ぶっ通しで要求され、「死ぬかと思った」と冗談めかす。男子日本代表の顔だ。19

快拳の陰に右腕の献身

年世界選手権（チェコ）で打撃の「二刀流」は過去最高成績に並ぶ銀メダル獲得の立役者となった。しかし、五輪のない男子にとって最高峰の舞台にもかかわらず、偉業は全国的にはほとんど注目されず、マイナー競技の悲哀を味わった。「女子の活躍で競技を一人でも多くの人に知ってもらえるなら、何でもする」。その一心でこの4年間、献身的なサポートを続けてきた。

国際大会の経験は男子で随一。総社市出身で旧知の原田のどか（29）や五輪で大ブレイクしたサウスポー後藤希友（20）らに助言を求められることもあったという。

今大会もチームに帯同し、試合前練習の打撃投手を務めた。全6試合で計6本塁打。「速球に目が慣れ、重い球を押し込む力が付いた」。長打力不足に悩んだ、かつての日本の姿はない。腕を振り続けた日々は報われた。

次回パリ大会では実施されないことが決まっている。チームジャパンが思いを一つにつかんだ最も輝くメダルはソフトボール界の未来を照らす。松田投手はそう信じている。

（田井香菜子）